

吉田啓一著

改訂

外国為替と国際金融

泉文堂版

3033-280003-3908

昭和55年3月10日 改訂第3刷発行 改訂外国為替と国際金融

定価 2,400円

著者との申合
せにより検印
省略

著 者 吉 田 啓 一

発 行 者 大 坪 ●嘉 春
東京都新宿区下落合1-2-16

印 刷 所 松 沢 印 刷 株 式 有 限 公 司
東京都千代田区猿楽町2-6-3

発 行 所 株 式 有 限 公 司 泉 文 堂

東京都新宿区下落合1-2-16
電話 (03) (951) 9610 番
振替東京 5-13804 番
郵便番号 161

© 吉田啓一 1980

本書の内容の一部又は全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者及び出版社の権利侵害となりますので、コピーの必要がある場合は、予め当社あて許諾を求めて下さい。

序

本書は第一部において外国為替の理論と手続きを、第二部においては今日の国際金融関係を明らかにしようとするものである。周知のごとく国際間の経済的交流は近年急速に密度を高めてきた。特にわが国は、その速かな経済的成長に伴って、今や国際金融上にも重要な地位を占め、各国との協力関係もいよいよ緊密なものとなったのである。

国際的経済交流は、それが商品の売買であっても、サーヴィスの供与であっても、あるいはまた資本の貸借であっても、資金の国際的移動を伴うものであるが、国際間の資金移動は現金によって行われることはない。殆んどすべての資金移動には外国為替が利用される。またこれを行うのは個々の経済主体であるが、結局は国と国との貸借関係となり、国際収支として総合的に表示される。そのうえ各国は、それぞれ独自の貨幣制度を有するから、資金の移動に際しては必ず自国貨幣と外国貨幣とが交換されなければならない、したがって二国通貨の交換比率が問題となる。ここに外国為替相場の成立、変動等についての考察が必要となる。それゆえに国際金融を理解するための基礎理論として、外国為替の理論および実情を知らなければならぬのである。

しかし外国為替の問題は、要するに国際的資金移動を実現するための手段にはかならずものである。したがってわれわれは、いつそう広い立場から国際間の資金移動の原因および変化の実情を知り、これが国民経済または世界経済にいかなる影響を与えるかを明かにしなければならぬであらう。更に貿易や投資に基く資金移動が、為

替相場や為替政策によっていかなる影響をうけるか、また逆に為替相場や為替政策が、貿易や投資の動向によってどのような影響を受けるかという相互関係を充分に考察しなければならぬであろう。

現在の国際金融の特徴は、それが力強い国際的協力の上に立って営まれていることである。第一次大戦後、特に各国が金本位制度への復帰に失敗してからは、各国はそれぞれ自国の利益のみを守ろうとして、平価切下げ競争を繰返し、貿易障壁を高め、為替統制を強化して全く国際協力などはみられなかった。そのために国際的経済交流は甚だしく萎縮し、国内経済もまた停滞せざるを得なかった。そこでこれを教訓とし、このような事態を繰返さぬために、第二次大戦後は早くから国際協力によって、通貨の安定、決済機構の確立、貿易の拡大などが真剣に企図された。IMF、EMA、GATT、OECDなどはいずれも国際協力の賜であって、実際これらの機構によって貿易は伸長し、再三の国際金融上の危機は回避されたのである。このような国際協力の機構と成果を理解せずしては、今日の国際金融を語ることはできないであろう。

しかし国際的協力といい、それに基く機構といっても、決して固定的なものではない。世界経済の進展とともに、改革や再編成が当然考えられなければならぬ。発展途上の諸国への援助、為替・貿易・資本の自由化、世界貿易の拡大と国際流動性、新準備資産の創造の問題などは、いずれも今日の論議の焦点となっている。本書においても、これらの問題について若干の考察を試みた。これが幾分でも将来の見通しに役立てば幸いである。

昭和四十三年十二月

慶応義塾大学教授

経済学博士 吉田 啓 一

改訂版序

本書は昭和四十四年一月に初版を刊行し、幸にも数版を重ねることができたが、もはや七年の歳月を経過したので、既に現代的意義を失った部分もあり、新たに付け加えねばならぬ事態も少くないので、ここに改訂版を出版することとした。国際金融の情勢は日々変化しているが、特に戦後は国際的協力が実を挙げるとともに国際間の僅かな変化も全世界的な変動となって現われることは周知の事実である。従って理論的な部分はともかく、国際金融の現実の趨勢は、数年の間に全く様相を変える場合がある。IMF体制が確実な機能を果たしていた期間は比較的安定を保っていたが、一九六〇年代の終りからIMFも二つの大きな問題、すなわち国際流動性問題と平価調整の問題とを抱えることになり、国際金融情勢は全く目まぐるしいものとなった。特に近年世界的インフレーションの進行と、その中において現われはじめた各国の不況とは、いっそう世界貿易と金融情勢を動揺させた。本書はこれらの近年の情勢を充分に考慮して、新たに筆を加えたものである。

昭和五十年十月

著者

目次

第一部 外国為替の理論

第一章 國際的經濟交流

一 國際貸借と國際収支

經濟交流と資金の移動 國際貸借 國際収支 國際貸借と國際収支の違い

二 國際資金移動

國際資金移動の原因 資本の國際的移動 國際収支表

三 國際決済手段

世界貨幣 国内貨幣による決済 金による決済 外国為替による決済

第二章 外国為替の概念

一 為替の意義

為替の利益 内国為替 送金為替と逆為替 為替尻

二 外国為替の手続

三

外国為替と内国為替の相違	外国為替取引	外国送金為替	外国逆為替	三
三 外国為替手形				三
外国為替手形の特質	外国為替手形の分類			
四 信用状				四
信用状の開設	商業信用状の分類	旅行信用状		
三 外国為替市場				三
一 外国為替市場の構成と機能				三
外国為替市場とその構成分子	顧客	為替銀行	為替仲買人	対顧客取引
銀行の売持・買持	為替尻操作			銀行間取引
二 直物取引と先物取引				六
直物と先物	先物取引の目的	先物取引の受渡	為替投機業者	
三 外国為替操作				六
外貨資金と邦貨資金	為替操作	外貨資金調整	邦貨資金調整	外貨資金と邦貨資金との関係
四 為替相場				七
一 為替相場の表示法と種類				七
為替相場の表示法	打歩と割引	売相場と買相場	期限による相場の種類	信用の程度に

よる區別

二 為替の裁定……………七九

為替の均衡体系 平面的均衡体系 立体的均衡体系

三 為替相場の帰着点……………六六

金本位制と為替相場 法定平価 金本位制の自動的調整機能 管理通貨制度と為替相場

第五章 為替相場決定の理論……………六三

一 国際貸借説……………六三

貨幣制度と為替理論 古典学派の為替理論 ゴッシェンの国際貸借説 国際貸借説批判

二 購買力平価説……………一〇〇

金本位離脱後の為替相場 カッセルの購買力平価説 購買力平価説批判

三 為替心理説……………一〇五

為替相場と国内物価 質的要因と量的要因 為替相場変動の原因 為替心理説批判 三三〇
の為替理論とその後の発展

第六章 為替政策……………一二三

一 金本位制下の為替政策……………一二三

為替政策の目的 為替政策の段階 金本位制と為替政策 割引政策 公開市場操作

二 紙幣本位制下の為替政策……………一二八

第二部 国際金融論

第一次大戦後の為替事情 為替統制資金制度 為替管理制度 為替管理の発展

第一章 プレトン・ウッズ体制

一 ケインズ案とホワイト案

戦後の世界経済対策 ケインズ案 ホワイト案 両案の比較

二 IMF(国際通貨基金)の成立

ブレトン・ウッズ国際会議 IMFの目的 為替の安定 世界経済の拡大 外貨資金の供

与 IMFの管理機構

三 世界銀行その他の機関

世界銀行 世界銀行の融資 第二世界銀行と国際金融公社

四 IMFの発展

IMFの理想と現実 IMF不活発の原因 欧州諸国の経済的回復

五 GATT(関税および貿易に関する一般協定)

ITOの構想 国際協定としてのGATT GATTの目的 GATTの例外規定 GA

TTへの新規加入

第二章 戦後のドルとポンド

一 ドル不足からドル不安へ

ドルの世界的不足 マーシャル・プラン ドル不足の緩和 アメリカの国際収支悪化
ル不安 ド

二 戦後のポンド 一六六

イギリスの為替統制 英米金融協定 一九四七年の為替管理法

三 ポンドの交換性回復 一七三

一九四九年のポンドの平価切下 イギリスの復興と貿易 為替政策の緩和 為替管理法の改正
ポンドの「事実上の」交換性回復

第三章 欧州における決済機構の進展 一八

一 EPU (欧州決済同盟) 一八

EPUの成立 EPUの多角的決済 EPUの性格 EPUの成果

二 EMA (欧州通貨協定) 一八

EPUからEMAへの移行 交換性の回復 EECとEFTA EMAの二つの機能 為替市場の活動 OECDの成立 OECDの下部組織

第四章 経済的統合 二〇

一 地域的経済統合 二〇

国際協力の二つの型 アメリカと欧州の利害 ECSCの発足 EECの成立 EECの機関

二	EEC（欧州共同市場）の目的	三九
	貿易障壁の撤廃	
	経済的交流の自由化	
	共通経済政策の樹立	
	共通機関の設立	
	EECの実績	
三	EEFTA（欧州自由貿易連合）	三八
	EFTAの構成	
	イギリスのEEC加盟問題	
	EEC側の問題	
第五章	国際流動性	三三
一	ドル不安と国際的ドル防衛	三三
	ドル不安の発生	
	アメリカの国際収支赤字	
	ドル防衛	
	バーゼル協定と西欧諸国の通貨	
	国際貿易の拡大	
二	国際流動性の内容	三三
	国際流動性の意味	
	金	
	外貨	
	クレディット・ファシリティ	
	国際流動性構成要素の比率	
	国際貿易量と国際流動性	
三	国際流動性の不足	三九
	国際流動性不足対策	
	IMFの対策	
	IMF東京総会	
	IMFの対立	
	見解	
	世界銀行総会	
四	IMFと国際流動性増強の研究	四七
	IMFの増資と一般借入協定	
	新準備資産創造の研究	
	オッソラ報告	
	ハーグ報告	

五	I M F特別引出し権 (S D R)	三五
	新準備資産 S D R S D R制度の運営 S D Rの効果	二六〇
第六章	平価調整	二六〇
一	ポ ン ド	二六〇
	ポンドの平価切下 イギリスのデフレーション政策 ポンドの平価切下とイギリス経済	二六〇
	E E C加盟のための新条件 ポンド対策	二六〇
二	ポ ン ド	二六五
	ポンド切下とドル ゴールド・ラッシュ フランスの五月危機	二六五
三	変動為替制	二七
	ニクソン声明と変動為替制 スミソニアン体制 石油ショックと国際金融	二七

訂改

外国為替と国際金融

第一部 外国為替の理論

